

レポート作成における読み手を意識した文章作成方略使用尺度の開発

○田中 光 (広島大学大学院)
山根高史 (広島大学大学院)

中條和光 (広島大学大学院)
有馬比呂志 (近畿大学)

キーワード：アクティブ・ラーニング、初年次教育、読み手意識

現在、多くの大学の初年次教育で、能動的な学習活動のために、レポート作成の指導が行われている。また、平成29年3月公示の中学校指導要領国語科、第1学年では、「本や資料から文章や図表などを引用して説明、記録するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動」などを通して、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することが目指されている。そこで、本研究では読み手が理解し易いレポート作成の指導法を探索する。

岸・辻・初山 (2014) は、説明文産出において読み手を意識することの重要性を指摘している。岸ら (2014) は、説明文産出場面における読み手意識を測定する尺度を作成し、読み手意識の構造を検討している。そこで本研究では、岸ら (2014) と同様の方法で、大学生を対象にレポート作成における読み手意識尺度、すなわち読み手を意識した配慮や工夫についての意識尺度を作成する。さらに本研究では、レポートの執筆段階と推敲段階に分けて読み手意識について調査する。

方 法

参加者 大学の学部生 202 名を対象とした。

質問紙 大学院生 29 名を対象に予備調査を行い、調査用紙に普段の大学の授業で行っているレポート作成における読み手に対する配慮と工夫を記入させた。調査用紙への回答をもとに質問紙を作成した。

手続き 質問紙を用い、読み手への配慮と工夫に関する各項目について、レポートの執筆段階・推敲段階でどの程度当てはまるかを 5 件法で回答させた。また、レポート作成の自己効力感についても 5 件法で回答させた。

結果と分析

各項目の評定値に対して、執筆段階と推敲段階の回答を合わせ、探索的因子分析 (最尤法、斜交回転) を行った。データの分析では、参加者 202 名の中から、データに不備のない、156 名を対象とした。その結果、Table 1 のような 7 因子構造が見出された。この 7 因子構造に対して、確認的因子分析を行ったところ、適合度は許容される値を示した (RMSEA=.07, CFI=.86, TLI=.84, SRMR=.07)

レポート作成の自己効力感で参加者を低群 (23 名：平均-1SD)、高群 (24 名：平均+1SD) に分け、各因子にお

ける平均評定値を比較した (Figure 1)。各因子に対し 2 (自己効力感：低群・高群) × 2 (レポートの作成段階：執筆段階・推敲段階) の分散分析を行った。その結果、論理・文章の構成因子で高群が低群より値が高いという有意傾向が見られ、関心を引く配慮因子では高群が低群より有意に値が高かった。また、図表・レポート形式の確認因子では交互作用が有意傾向であり、レポートの推敲段階で低群が高群より値が高い傾向が見られた。

Table 1 探索的因子分析によって見出された 7 因子

1. 論理・文章の構成 ($\alpha = .84$)	因子負荷量
全体の論理の展開に注意する。	0.83
論の展開を分かりやすくする。	0.77
レポートの命題やテーマを明確に述べる。	0.74
論理を一貫させる。	0.63
文章構成に注意する。	0.62
説明不足にならないように丁寧に説明する。	0.52
主語と述語を対応させる。	0.43
専門用語の定義を明確にする。	0.40
2. 表記や表現の確認 ($\alpha = .82$)	
文法的に不適切な表現を避ける。	0.93
誤変換をしないようにする。	0.83
誤字脱字を見つける。	0.67
句読点の位置が適切か確認する。	0.62
言葉のニュアンスが伝えたい内容とずれないようにする。	0.56
レポートの種類と形式が対応しているか確認する。	0.44
重要な情報が省略されていないか確認する。	0.38
3. 他者によるチェック ($\alpha = .94$)	
他の人に読んでもらい、違和感がないかチェックしてもらう。	0.99
他の人に見てもらってコメントをもらう。	0.97
友人や先生に読んでもらう。	0.81
4. 図表・レポート形式の確認 ($\alpha = .71$)	
図表でまとめられるところは、図表にする。	0.80
その分野のレポートのマニュアルを参照する。	0.73
似たようなレポートを参考にする。	0.53
図表と文章の対応を確認する。	0.52
同じ意味を表す言葉はなるべく統一する。	0.40
5. 簡潔化 ($\alpha = .82$)	
文を冗長にしない。	0.96
一文が長くなりすぎないようにする。	0.64
簡潔に書くようにする。	0.55
6. 関心を引く配慮 ($\alpha = .74$)	
読み手が興味を持つように心がける。	0.90
読み手の関心をひくような文章を書く。	0.83
レポートの独自性をアピールする。	0.42
7. 読み返し ($\alpha = .73$)	
時間を空けて読み返す。	0.78
数回読み返す。	0.74
読み手の視点に立って文章を読み返す。	0.41
プリントアウトして声に出して読む。	0.41



因子間相関	2	3	4	5	6	7
1	0.71	0.23	0.43	0.48	0.44	0.42
2		0.18	0.44	0.47	0.33	0.42
3			0.52	0.24	0.38	0.42
4				0.25	0.36	0.35
5					0.22	0.32
6						0.43

Figure 1. レポートを書くことへの自己効力感高低群における因子ごとの平均評定値